

調査報告

農薬はどう教えられているか

—教科書に登場する農薬—

京都大学大学院農学研究科 みや 宮 がわ 川 ひさし 恒

はじめに

農業生産の現場において農薬は必須の資材として認識され、生産性の向上に大きく貢献しているにもかかわらず、社会における農薬に対するイメージは極めて悪い。農薬は食品を汚染し、健康を害するものであり、使わないほうがよい、あるいは使うべきではないものとして認識されている。結果として「無農薬」や「減農薬」という用語が「こだわりの」や「からだに優しい」を売りにする食材や食品に対して「有機」「オーガニック」とともに、商品を何か普通のものとは違う「よい」ものとして差別化するために頻繁に利用される。

その一方で人々は農薬のことを実際にはほとんど知らない。例えば授業で、風邪薬や胃腸薬なら名前を挙げるのできる学生に対して「知っている農薬の名前を挙げて下さい」と尋ねても、ほとんどの場合の答は「知りません」である。ただし少数ではあるが「DDT」というのは聞いたことがある」という答も必ず出てくる。「農薬のことはあまり知らないけれど、からだや環境によくないものである。その代表はDDT」というのが一般的なイメージであるようだ。

どうしてこのようなイメージが作られるのだろうか？ 筆者は先頃、この疑問に関連して日本で農薬がどのように教えられているのかについて調べ、その結果を小文にまとめた(宮川, 2017)。本稿では、その続編として、農薬が小学校から高校の教科書にどのような形で登場するのかをより詳しく紹介したい。

I 学習指導要領と農薬

文部科学省が示している小学校から高校(普通科)までの学習指導要領(文部科学省, 2008; 2009)に「農薬」という単語自体は出てこない。高校農業科ではいくつかの教科の内容の取り扱いの中に「農薬」の文字が見えるが、病害虫・雑草防除における農薬の役割を解説せよと

いう趣旨にはなっていない。

直接「農薬」という言葉は出てこないが、農業や農家の仕事、地域の生産活動を学ぶことが小学校3・4年および5年の社会で求められている。

中学校の要領には、調べた限り農薬が関連しそうな事項は見当たらない。

高校では化学で「化学と人間生活」, 「有機化合物の性質と利用」等を取り上げることになっており、題材として農薬を取り上げることが考えられる。また生物では「生態系」に関連して農薬など化学物質の影響が言及されることがあるだろう。

以上をふまえ、以下実際に教科書の中で、どのように「農薬」が登場するのかを見ていきたい。

II 教科書に登場する「農薬」

1 小学校社会

(1) 3・4年

小学校3年生から4年生にかけて、社会は一つの科目として2年間で学ぶことになっている。指導要領(2)は、選択であるが農家の仕事を地域の生産活動の一つとして取り上げることが求めている。この説明の中で農薬が登場する。

まず東京書籍「新しい社会」上巻(2015)では、「はたらく人とわたしたちの暮らし」として仙台近郊のまがりねぎ栽培のことを調べるようすが記されている。子供たちが、作業の内容に興味を持って質問し、生産者(関内さん)が答えるという形で話が進む中、「虫がつかないわけ」については次のように述べられている(以下、引用文は適宜漢字を交えて書き直している)。「虫がつかないように農薬をまいています。ねぎに虫がつくのは、おいしい証拠ですが、売れないと困ります。ねぎに虫がついたり、病気になったりしないように、年に3回ほど農薬をまいています。できるだけ少ない回数ですむように工夫しています。」この中で「ねぎに虫がつくのはおいしい証拠」は科学的には問題と思われる。

また、この東京書籍版は下巻(2015)で指導要領(6)ウの「特色ある地域の人々の生活」に、「コウノトリを育てる町」兵庫県豊岡市の活動を紹介する形で対応して